

サービスと運営管理

土屋 薫 (江戸川大学)

要旨

期間内の学会誌に掲載されている「サービスと運営管理」に関わる文献は、原著論文に限れば、1年に1本に満たない割合でしか発表されていない。また、レジャー産業自体のトレンドも反映されていない。これを学会大会における口頭発表で捉えてみると、関連文献の総数は、比率の上では原著論文より3倍以上多くなっている。このことは、研究テーマとして速報性の重要さが意識された結果と見ることができる。

同じくこの分野に関する学会大会での口頭発表数の経年変化を見ると、年によって大きなバラつきがある。これは学会大会ごとのテーマとも関連があるが、学会として、この分野が必ずしも主要な領域となり得ていないことを意味している。

今後の研究上の課題は、乖離しつつある学会の方向性と行政や企業の運営あるいはマーケティングとの間を埋めるところにある。

その課題克服の方向性を探るために、期間内に掲載された文献について、原著論文や研究資料といった細目に関係なくそのテーマに沿って分類してみると、ベスト3は上から自然分野(27件)、ついでスポーツ・身体分野(24件)、教育分野(23件)であった。この経年変化を見ると、自然分野とスポーツ・身体分野との「せめぎあい」の中に教育分野が位置していることがわかる。これは学会誌の編集方針を表した結果と捉えられるが、一方で投稿論文の偏りを反映していることも予想される。実際には、この3分野における学会大会の口頭発表数の経年変化は、学会誌に見られる文献比率よりも偏りが少ない。

したがって、学会大会と学会誌の研究成果を結ぶことが問題状況の是正につながる。具体的には、業界関係者や行政担当者、現場実践者の参加しやすい、あるいは参加意義を強く感じさせるような形で研究会活動を活性化できれば、速報性を保持しつつ、より精緻な信頼性・妥当性を実現した研究成果を社会に還元することができる。

第1章 緒言

本論は「サービスと運営管理」の観点から、レジャー・レクリエーション研究の動向を整理し、その将来展望を見出すことを目的としている。また、「学会の歩み 第1号」が刊行されて以降、1996年から現在に至る時期をその対象としている。具体的には、観光商品としてのレジャーの傾向、あるいは行政の取り組み、組織運営の動向といったテーマを想定している。つまり、担い手としては企業だけでなく行政も視野に入れている。また、マーケティング関連、観光全般に関わる研究も扱うことを意味する。

第2章 レビューの方法

1. 分析の枠組み

本論は「サービスと運営管理」という分野を扱うため、分析の都合上、対象期間のレジャー市場についても概観しておく必要がある。したがって、ここでは『レジャー白書』(1996～2000年：財団法人余暇開発センター編集発行、2001～2002年：財団法人自由時間デザイン協会編集発行、2003～2009年：財団法人社会経済生産性本部編集発行)をレビューした。

2. レビューの対象

本論では、研究動向のレビューとして、学会誌『レジャー・レクリエーション研究』に掲載された関連分野の文献を整理した。その際、学会大会発表論文集は別枠で取り扱うこととした。

第3章 先行研究の特徴や動向

1. レジャー市場の概況

この15年間のレジャー市場は3～4年ごとのトレンドとして把握することができる。

1995年からは、バブル経済崩壊後の深刻な経済状況を乗り越えるため、様々な模索が見られた。具体的には、①セルフ化②ネットワーク化③複合化といった視点で整理できる^{1) 2)}。セルフ化とネットワーク化は構造改革による低下価格化を実現し、異業種間の協業化・複合化によって経営効率や商品・サービスの付加価値が高められた³⁾。またそれは、パワーセンターあるいはモールといった形を取っていった。衛星デジタルテレビ放送やインターネットの普及、シネコン（シネマコンプレックス）、プリクラ（プリント倶楽部）の登場、ディスカウントストア「ドンキホーテ」が脚光を浴びるとともに、ガーデニングが人気を呼んだのもこの時期である⁴⁾。

1999年頃からは、特に①時間消費性②コミュニケーション重視といった方向性が見られるようになった。「 Junk 堂書店」における店内へのテーブルやイスの配置、あるいは近畿日本ツーリストの「クラブ・ツーリズム」のような「会員制」のサービス提供もこの流れの中で捉えることができる⁵⁾。また、「携帯電話市場」や「ペット市場」、スーパー銭湯に代表される「温浴施設」など、新たなレジャー市場創出もこの文脈から捉えられる⁶⁾。2001年は「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」と「東京ディズニーシー」の2つの大規模テーマパークがオープンしたが、9月11日にアメリカで同時多発テロ事件が起きたため、旅行業全体は大幅に状況が悪化した⁷⁾。

2002年頃からは、低価格化の進展によるデフレ不況を克服するために、新たなビジネスモデルを模索し、新たな市場を開拓する動きが出てきた⁸⁾。韓流ブームや「PS2」の中国進出、インバウンドへの取り組みとしての「ビジットジャパンキャンペーン」もその結果として捉えることができる⁹⁾。また、各スポーツの子供市場への参入やモスバーガーの「ニッポンのバーガー匠味」シリーズ・高級ビュフェ「柿安三尺三寸箸」に見られるような外食産業の高級ブランド化、「脳トレ」ブームに見られるシニア化もこの流れで理解できる¹⁰⁾。この動きの背景には、これまでレジャー産業牽引の柱の一つとされてきた若年層のレジャー離れが挙げられる^{11) 12)}。

2006年頃からは、オイルサーチャージ（燃油特別付加運賃）やリーマンショック、新型インフルエンザなど、レジャー産業にとって大きな障壁が新たに登場した¹³⁾。ただもちろん、ニンテンドーの「Wii」の登場や、「BIG」と「miniBIG」で売上高を大きく伸ばしたスポーツ振興くじ toto（トト）、高速道路料金値下げといった明るい材料も存在する。また2009年は「電気自動車元年」と言われ、新市場としても注目されている¹⁴⁾。

2. 『レジャー・レクリエーション研究』の動向

期間内の学会大会抄録を除いた学会誌第33号から第64号に掲載されている文献114件（学会報告も含む）のうち、「サービスと運営管理」に関わる文献は26件（22.81%）となっている。原著論文に限れば全38件（33.93%）のうち、11件（9.65%）となっている¹⁵⁻²⁵⁾（表1）。

〔Ⅲ〕 特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

表1 期間内の「サービスと運営管理」関連分野原著論文リスト

巻	著者	研究題目	発行年
35号	杉本文・松田義幸	自由学芸教育のモデルとしてのグレート・ブックス・セミナー	1996年
36号	陳盛雄・栗田和弥・麻生恵	台湾におけるキャンプの変遷に関する研究、一キャンプに関する諸団体の動きとそのキャンプ活動を中心として一	1997年
40号	赤堀方哉・山口泰雄	民間レクリエーション団体会員の継続意欲に関する研究	1999年
44号	岡村泰斗・飯田稔・関智子	子ども長期自然体験村事業に関する評価研究、一参加者の達成動機、友人関係、自然認識に着目して一	2001年
44号	赤堀方哉	NPO法の受容が民間レクリエーション団体に与えた影響に関する一考察	2001年
44号	陳盛雄・栗田和弥・麻生恵	台湾におけるキャンプの発展に影響を与えた諸要素に関する研究	2001年
45号	土居守	ホテル・リッツにみるホスピタリティ序論、一ホスピタリティとサービスの関連について一	2001年
52号	平野貴也	黎明期におけるウインド・サーフィンの普及に関する研究、一日本ウインドサーフィン協会の活動を中心に一	2004年
60号	長積仁・佐藤充宏・松永敬子・榎本悟	地域文化に対する享受能力がコミュニティへの帰属意識に及ぼす影響、一地域文化を活かしたまちづくりの有効性の検討一	2008年
60号	陳智益・下嶋聖・栗田和弥・麻生恵	台湾国家公園の発展と多様な主体の参画に関する研究	2008年
64号	陳智益・下嶋聖・栗田和弥・麻生恵	台湾・金門国家公園における公園事業と多様な主体参画の可能性	2010年

割合で見ると必ずしも少ないようには見えないが、15年間にのべ18冊刊行された学会誌に、関連原著論文が11件しか無いということは、1年に1本に満たない程度の割合でしか研究成果が発表されていないことを示している。また、先に見たレジャー産業自体のトレンドもほとんど取り上げられていない。

また学会大会における発表で捉えてみると、口頭発表数は340件にも上る。原著論文が11件だったのと比べると、その絶対数は多い。また全発表数340件（口頭発表に限る）のうち、「サービスと運営管理」に関わる文献は101件（29.70%：教育施設の運営は除く）となっており（表2）²⁶⁻¹²⁶、比率の上でも3倍以上多くなっていることがわかる。このことは、研究テーマとして速報性の重要さが意識されている結果とも取れる。

表2 関連テーマ発表数の経年変化

年次	開催年	会場校	発表総数	関連テーマ発表数
第26回大会	1996年	奈良女子大	24	1
第27回大会	1997年	東京農業大	30	11
第28回大会	1998年	福岡大学	31	15
第29回大会	1999年	淑徳大学	27	9
第30回大会	2000年	明治大学	29	10
第31回大会	2001年	千葉大学	27	6
第32回大会	2002年	大分大学	17	5
第33回大会	2003年	東北福祉大学	27	7
第34回大会	2004年	立教大学	27	5
第35回大会	2005年	国際基督教大学	19	6
第36回大会	2006年	平安女学院大学	26	7
第37回大会	2007年	東洋大学	15	4
第38回大会	2008年	新潟医療福祉大学	21	4
第39回大会	2009年	江戸川大学	20	11
			340	101

またこの分野に関する発表数の経年変化を見ると（図1）、年によって大きなバラつきのあることがわかる。これは学会大会ごとのテーマとも関連があると考えられるが、学会として、この分野が必ずしも主要な領域となっていないことは否めないだろう。

また必ずしも資料として妥当であるとは言えないが、学会誌への広告数と比較してみると（B5版1ページに対して2件として換算）、2002～2003年を境にして、2004年からは掲載数が極端に落ち込んでいる。このことは景気の動向も考慮に入れないといけないが、行政も含め企業や観光業のマーケティングあるいは運営に関わる側の求めるものと学会の方向性とは乖離してきたことを示していると言えないだろうか。

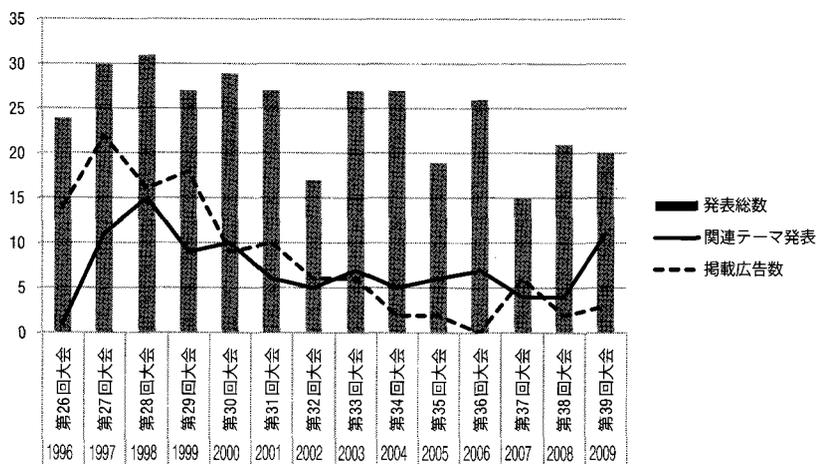


図1 学会大会における「サービスと運営管理」関連分野発表数

第4章 今後の研究の課題とその方法論の展望

前章末で見た通り、今後の研究上の課題は、学会の方向性と行政や企業の運営あるいはマーケティングと乖離してきたところに見出せる。これを是正する上で必要な点について、最後にもう一度学会誌（学会大会発表論文集を除く）に掲載された文献の分野について整理してみたい。

期間内の33号から64号までの計18冊に掲載された文献を、原著論文や研究資料といった細目に関係なく、そのテーマに沿って分類したところ、ベスト5は上から自然分野（27件）、ついでスポーツ・身体分野（24件）、教育分野（23件）、療養分野（14件）、遊び分野（13件）であった（重複してカウントしたので、必ずしも総計は全数にならない）。

このうち上位3つの経年変化をまとめたのが図2である（36号と54号はどの分野の文献も無かったため除いた）。これを見ると、自然分野とスポーツ・身体分野との「せめぎあい」の中に教育分野の文献が位置していることがわかる。これは当然学会誌の編集方針を表した結果として捉えられるが、反面、投稿論文の偏りを反映していることも考えられる。

ここで同様の集計を学会大会の口頭発表に関して行った結果が図3である（図2と軸を合わせるため、1998年および2005年は除いた）。

これを見ると、学会誌に見られる文献数よりも偏りが少ない。学会大会における口頭発表と学会誌における文献掲載の差異を考えると、それは研究成果の速報性よりも精緻な信頼性・妥当性に見出せる。両者の溝を埋めることこそ今後求められることであり、そのためには、年に1度の学会大会の間を埋める研究会活動の推進が求められるであろう。業界関係者や行政担当者、現場実践者が参加しやすい、あるいは参加意義を強く感じる研究会活動の実現こそ今求められているのではないだろうか。

〔Ⅲ〕 特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

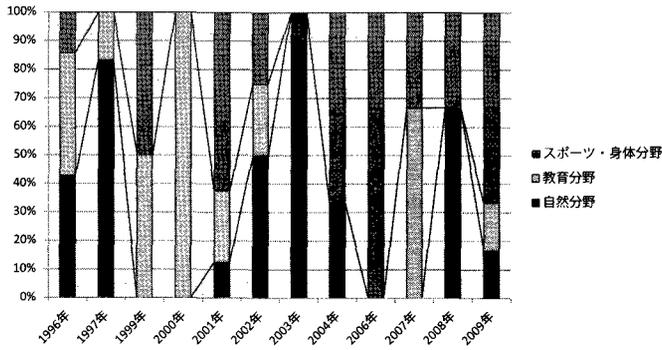


図2 学会誌に見られる主要3分野の文献数の経年変化

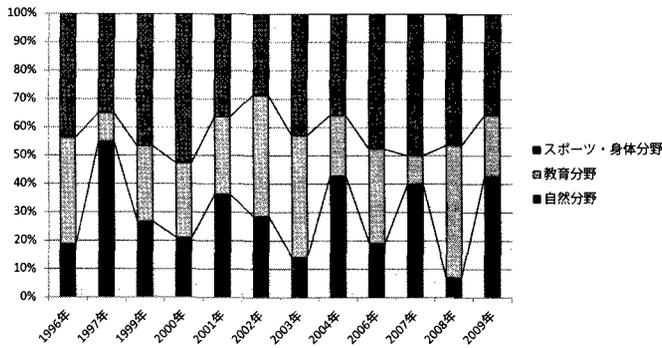


図3 学会大会に見られる主要3分野の発表件数の経年変化

本来ならば、本学会の研究のあり方自体を検討する上で、“Journal of Leisure Research” に代表されるような海外の研究誌の状況や現場の実態と比較して相対化することが望ましいが、紙幅の都合上、別の機会に譲らなければならない点ご了承ください。

文 献

- 1) 財団法人余暇開発センター、レジャー白書 1996 : 78-79、1996
- 2) 財団法人余暇開発センター、レジャー白書 1998 : 82-83、1998
- 3) 財団法人余暇開発センター、レジャー白書 1999 : 78-82、1999
- 4) 財団法人余暇開発センター、レジャー白書 1997 : 76-77、1997
- 5) 財団法人余暇開発センター、レジャー白書 2000 : 83-86、2000
- 6) 財団法人自由時間デザイン協会、レジャー白書 2001 : 5-8、2001
- 7) 財団法人自由時間デザイン協会、レジャー白書 2002 : 3-5、99-101、2002
- 8) 財団法人社会経済生産性本部、レジャー白書 2003 : 3-6、95-98、2003
- 9) 財団法人社会経済生産性本部、レジャー白書 2004 : 2-8、53-55、2004
- 10) 財団法人社会経済生産性本部、レジャー白書 2005 : 2-4、47-49、70-73、2005
- 11) 財団法人社会経済生産性本部、レジャー白書 2006 : 1-3、47-50、68-69、2006
- 12) 財団法人社会経済生産性本部、レジャー白書 2007 : 2-4、47-49、2007
- 13) 財団法人社会経済生産性本部、レジャー白書 2008 : 3-4、45-47、2008

〔Ⅲ〕 特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

- 14) 財団法人社会経済生産性本部、レジャー白書 2009：45-47、78-80、2009
- 15) 杉本文・松田義幸、自由学芸教育のモデルとしてのグレート・ブックス・セミナー、レジャー・レクリエーション研究 35：1-9、1996
- 16) 陳盛雄・栗田和弥・麻生恵、台湾におけるキャンプの変遷に関する研究 ～キャンプに関する諸団体の動きとそのキャンプ活動を中心として～、レジャー・レクリエーション研究 36：1-17、1997
- 17) 赤堀方哉・山口泰雄、民間レクリエーション団体委員の継続意欲に関する研究、レジャー・レクリエーション研究 40：25-33、1999
- 18) 岡村泰斗・飯田稔・関智子、子ども長期自然体験村事業に関する評価研究 ～参加者の達成動機、友人関係、自然認識に着目して～、レジャー・レクリエーション研究 44：1-9、2001
- 19) 赤堀方哉、NPO 法の受容が民間レクリエーション団体に与えた影響に関する一考察、レジャー・レクリエーション研究 44：27-34、2001
- 20) 陳盛雄・栗田和弥・麻生恵、台湾におけるキャンプの発展に影響を与えた諸要素に関する研究、レジャー・レクリエーション研究 44：35-45、2001
- 21) 土居守、ホテル・リッツにみるホスピタリティ序論 ～ホスピタリティとサービスの関連について～、レジャー・レクリエーション研究 45：1-10、2001
- 22) 平野貴也、黎明期におけるウインド・サーフィンの普及に関する研究 ～日本ウインドサーフィン協会の活動を中心に～、レジャー・レクリエーション研究 52：11-22、2004
- 23) 長積仁・佐藤充宏・松永敬子・榎本悟、地域文化に対する享受能力がコミュニティへの帰属意識に及ぼす影響 ～地域文化を活かしたまちづくりの有効性の検討～、レジャー・レクリエーション研究 60：15-27、2008
- 24) 涂智益・下嶋聖・栗田和弥・麻生恵、台湾国家公園の発展と多様な主体の参画に関する研究、レジャー・レクリエーション研究 60：55-69、2008
- 25) 涂智益・下嶋聖・栗田和弥・麻生恵、台湾・金門国家公園における公園事業と多様な主体参画の可能性、レジャー・レクリエーション研究 64：23-38、2010
- 26) 谷戸一雅・高橋和敏、キャンプ・アーメックが東京YMCA 長期キャンプに及ぼした影響、レジャー・レクリエーション研究 34：98-99、1996
- 27) 高垣正道・高橋和敏、自閉症児キャンプにおける問題点 ～過去の実施過程から～、レジャー・レクリエーション研究 37：48-51、1997
- 28) 上野幸・山崎律子、高齢者施設におけるレクリエーション活動とその問題点 ～とくに有料老人ホームの場合(事例報告)～、レジャー・レクリエーション研究 37：52-55、1997
- 29) 嶋野弥名子・栗田和弥・麻生恵、群馬県川場村友好の森における「やま(森林)づくり塾自然教室」について、レジャー・レクリエーション研究 37：82-83、1997
- 30) 岩間貴之・栗田和弥・麻生恵、横浜市緑区中山中学校区域内におけるワークショップ方式による花と緑の市民まちづくり地図製作、レジャー・レクリエーション研究 37：84-87、1997
- 31) 油井正昭・古谷勝則、世界各国における自然保護地域の指定動向について、レジャー・レクリエーション研究 37：90-93、1997
- 32) 養茂寿太郎、レジャー・レクリエーション環境としての公園の考察、レジャー・レクリエーション研究 37：94-97、1997
- 33) 金子忠一、バンクーバーにおける公園レクリエーションプログラムの現状、レジャー・レクリエーション研究 37：98-99、1997
- 34) 早川章治・鈴木誠・服部勉、鮮魚センターを中心とした寺泊町観光の形成に関する史的考察、レジャー・レクリエーション研究 37：100-103、1997
- 35) 笠木秀樹、岡山県における農村リゾートの研究、レジャー・レクリエーション研究 37：104-107、1997
- 36) 原田尚幸、参加型スポーツイベントの運営に関する研究 ～特にトライアスロン大会に対するイメージについて～、レジャー・レクリエーション研究 37：110-113、1997
- 37) 陳盛雄・川村協平・前野淳一郎、「キャンプ場の個性的な魅力づくり」に関するアンケート調査 ～日本・台湾・ヨーロッパのキャンプ場の景観写真による～、レジャー・レクリエーション研究 37：128-131、1997
- 38) 鈴木秀雄、新たなレクリエーション運動の展開に向けての人材養成 ～(社)横浜市レクリエーション協会の事例を中心に～、レジャー・レクリエーション研究 39：20-23、1998
- 39) 寺島善一、英国のレジャー政策と政府・公的機関の関与 ～その歴史的展開と思想的背景を中心に～、レジャー・レクリエーション研究 39：24-27、1998

〔Ⅲ〕 特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

- 40) 廣田治久・高橋和敏、レクリエーションの視点から見たマサチューセッツ湾植民地の意義 ～アメリカ公共レクリエーションの源流として～、レジャー・レクリエーション研究 39: 28-31、1998
- 41) 立木宏樹、スポーツ応援行動に関する社会学的研究 ～Jリーグにおけるアビスパサポーターを中心に～、レジャー・レクリエーション研究 39: 54-55、1998
- 42) 高橋伸・橋本和秀・廣田治久、Camp O-AT-KA における伝統性 ～指導者としての参加経験をもとに～、レジャー・レクリエーション研究 39: 64-67、1998
- 43) 巖謙烈・大堀孝雄・新出昌明、スペシャルオリンピックス会員におけるボランティアのイメージについて、レジャー・レクリエーション研究 39: 76-79、1998
- 44) 芳賀健治、日本の医療・福祉の現場で実践されるレクリエーションのアセスメントと評価の視点に関する研究 ～日本の実態に合わせたアセスメントと評価の模索～、レジャー・レクリエーション研究 39: 80-83、1998
- 45) 鈴木英悟・大堀孝雄・西野仁、スペシャルオリンピックス会員のボランティア活動に対する意識について ～参与形態によるボランティア活動と組織の機能の評価～、レジャー・レクリエーション研究 39: 84-87、1998
- 46) 塚本珪一、都市における自然観察会について ～京都御苑での事例～、レジャー・レクリエーション研究 39: 88-89、1998
- 47) 小泉勇治郎、地域づくりと農村リポート ～愛媛県上浮穴郡久万町の事例を通して～、レジャー・レクリエーション研究 39: 90-93、1998
- 48) 笠木秀樹、グリーンツーリズムの振興に関する一考察 ～バイエルン州における現状と課題～、レジャー・レクリエーション研究 39: 98-101、1998
- 49) 栗田和弥・植竹薫、市民NPOによる緑地の利用・管理の参加者誘致圏について ～東京都町田市かしの木山自然公園を事例に～、レジャー・レクリエーション研究 39: 106-107、1998
- 50) 安田直由、子どもスポーツ組織における加盟・継続・脱退を規定する要因論的検討 ～スポーツ少年団に着目して～、レジャー・レクリエーション研究 39: 108-109、1998
- 51) 山崎律子・上野幸、高齢者デイサービスにおけるプログラムングの問題点 ～とくにレクリエーション担当者からみた場合～、レジャー・レクリエーション研究 39: 120-123、1998
- 52) 大隈節子、バーンアウト過程に関する研究 ～ソーシャル・サポートとの関連で～、レジャー・レクリエーション研究 39: 124-127、1998
- 53) 赤堀方哉・安部保子、民間レクリエーション団体のNPO法受容過程に関する研究、レジャー・レクリエーション研究 41: 22-25、1999
- 54) 堀田哲一郎、アメリカの療法的レクリエーション専門職団体における立法運動の展開 ～2つの団体の見解の差異を中心に～、レジャー・レクリエーション研究 41: 52-55、1999
- 55) 立木宏樹・秋吉嘉範、福祉施設におけるレクリエーション指導に関する研究 ～レクリエーション援助者に注目して～、レジャー・レクリエーション研究 41: 56-57、1999
- 56) 笠原秀樹、高齢者施設におけるアクティビティの研究、レジャー・レクリエーション研究 41: 58-59、1999
- 57) 清水一巳・大谷義博・山田力也、高校野球における「甲子園神話」の再生産過程 ～潜在的カリキュラム論に依拠して～、レジャー・レクリエーション研究 41: 66-69、1999
- 58) 境広志、レクリエーションの視点からみた地域テニス活動の現状と課題 ～千葉テニス協会ベテラン委員会の事例を通して～、レジャー・レクリエーション研究 41: 74-75、1999
- 59) 廣田治久・栗原邦秋、地域活動と少年・少女キャンプについての実践報告 ～江東区少年の船の場合～、レジャー・レクリエーション研究 41: 92-93、1999
- 60) 栗田和弥・植竹薫、自然とふれあい活動への参加者誘致圏について ～東京都町田市かしの木山自然公園を事例に～、レジャー・レクリエーション研究 41: 98-101、1999
- 61) 田中伸彦、森林観光・レクリエーションに関わる資源・施設の地域ポテンシャル算出に関する考察 ～笠間地域を対象としたケーススタディ～、レジャー・レクリエーション研究 41: 102-105、1999
- 62) 鈴木秀雄・鈴木英悟、余暇教育学の視点から捉える啓発活動 ～玄倉川水難事故後の野外活動に対する啓発事例を中心に～、レジャー・レクリエーション研究 43: 18-21、2000

〔Ⅲ〕特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

- 63) 鈴木英悟、マクロ的視点からみるセラピューティックレクリエーション ～玄倉川事故の教訓から生まれた啓発活動を中心に～、レジャー・レクリエーション研究 43 : 38-41、2000
- 64) 山崎律子・高橋和敏、日本における公園活動とレクリエーション運動の統合の必要性について ～アメリカにおける現行事例に学んで～、レジャー・レクリエーション研究 43 : 46-47、2000
- 65) 芳賀健治、高齢者政策におけるレクリエーションの位置づけ ～日本とオーストラリアの比較から～、レジャー・レクリエーション研究 43 : 56-59、2000
- 66) 赤堀方哉、民間レクリエーション団体のNPO法受容過程に関する研究(2)、レジャー・レクリエーション研究 43 : 60-63、2000
- 67) 長岡雅美・永松昌樹・宮崎千枝、レクリエーション・スポーツクラブの活動状況と意識に関する研究 ～クラブ活動への参加状況と加入状況による意識の違いについて～、レジャー・レクリエーション研究 43 : 72-75、2000
- 68) 竹田隆行・松永敬子、自治体の生涯スポーツイベント開催までの経緯に関する一考察、レジャー・レクリエーション研究 43 : 76-77、2000
- 69) 芝誠貴・前橋明、レクリエーション活動を用いた育児支援プログラム ～親子運動プログラムと母親のレクスコア～、レジャー・レクリエーション研究 43 : 88-93、2000
- 70) 小泉勇治郎、西四国観光ネットワーク「ルーラルポケット」に関する一考察、レジャー・レクリエーション研究 43 : 110-113、2000
- 71) 嵯峨寿、ナイキCMにみるスポーツの遊戯性とrecreate効果、レジャー・レクリエーション研究 43 : 116-117、2000
- 72) 上野幸・山崎律子・高橋和敏、高齢者の余暇活動について(3) ～高齢者における類型化と高齢者に対するレクリエーション援助方法の確立に向けての事例研究～、レジャー・レクリエーション研究 46 : 13-16、2001
- 73) 茅野宏明、セラピューティックレクリエーションサービスモデルの実践に関する研究(1) ～アセスメント&プログラム計画(AP)シートの試案～、レジャー・レクリエーション研究 46 : 17-20、2001
- 74) 山本存、社会福祉領域からみたレクリエーション・余暇 ～ホームヘルパー養成講習受講者と福祉ボランティア実践者の事例から～、レジャー・レクリエーション研究 46 : 21-24、2001
- 75) 古谷勝則・油井正昭、日光国立公園尾瀬地区における自動車の利用規制について、レジャー・レクリエーション研究 46 : 43-46、2001
- 76) 長岡雅美・永松昌樹・森知香、児童の自由時間における遊びに関する事例研究 ～自然学校における自由時間の行動について～、レジャー・レクリエーション研究 46 : 91-94、2001
- 77) 高橋伸、戦前のセツルメント事業におけるキャンプ活動 ～興望館セツルメントに見るキャンプ活動について～、レジャー・レクリエーション研究 46 : 101-102、2001
- 78) 谷口勇一、ニュースポーツの変容過程に関する研究(3) ～変容に伴う支援団体間の有機的連携の可能性～、レジャー・レクリエーション研究 49 : 44-45、2002
- 79) 植木順子、長期療養型病床群におけるTRの実例、レジャー・レクリエーション研究 49 : 54-57、2002
- 80) 小池和幸、老人病院におけるレクリエーションサービス形態とレクリエーションワーカーのスキルについての考察 ～K老人病院におけるリハビリテーションとレクリエーションの取り組みより～、レジャー・レクリエーション研究 49 : 58-61、2002
- 81) 茅野宏明、老人ホームにおけるセラピューティックレクリエーションサービスの整備に関する一考察 ～A特別擁護老人ホームのケース～、レジャー・レクリエーション研究 49 : 66-69、2002
- 82) 小泉勇治郎、グリーン・ツーリズム運動と市民農園、レジャー・レクリエーション研究 49 : 72-75、2002
- 83) 植木順子、デイサービスにおけるTRサービスの実際、レジャー・レクリエーション研究 51 : 38-41、2003
- 84) 茅野宏明、セラピューティックレクリエーション・サービス・モデル(AGLモデル)の適応性、レジャー・レクリエーション研究 51 : 42-45、2003
- 85) 廣田治久・上野幸・山崎律子、高齢者デイサービスにおけるレクリエーションプログラムについての事例研究、レジャー・レクリエーション研究 51 : 58-61、2003
- 86) 草壁孝治、初期痴呆高齢者に対するレクリエーション療法の試み ～個人の状態に応じたプログラムの選択と展開～、レジャー・レクリエーション研究 51 : 62-65、2003
- 87) 外崎紅馬・左近慎平・金子勝司、余暇活動としてのボランティア学習に対する福祉施設の役割と課題、レジャー・レクリエーション研究 51 : 96-97、2003

〔Ⅲ〕 特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

- 88) 久保内智子・西野仁、ドイツのゴールデンプランの展開とベルリン州のスポーツ施設、レジャー・レクリエーション研究 51 : 108-109、2003
- 89) 高橋伸、総合型地域スポーツクラブ推進事業におけるレクリエーション概念の適用 ～M市における試みについて～、レジャー・レクリエーション研究 51 : 110-111、2003
- 90) 仲麻衣子・西野仁、クラシックカーイベントへの参加動機について ～ヴェブレンの『有閑階級の理論』を手がかりに～、レジャー・レクリエーション研究 53 : 72-75、2004
- 91) 廣田治久・山崎律子、企業における社員健康づくり事業と地域貢献に向けた取り組み ～T社における事例中間報告～、レジャー・レクリエーション研究 53 : 98-99、2004
- 92) 立木宏樹、地域福祉とレクリエーション ～地域レクリエーション協会に注目して～、レジャー・レクリエーション研究 53 : 100-103、2004
- 93) 谷口勇一・古城建一、地域との連携を意図したレクリエーション演習科目導入に伴う教育効果の検討 ～レクリエーション協会課程認定校における実践事例として～、レジャー・レクリエーション研究 53 : 104-107、2004
- 94) 金子良知夫・下嶋聖・麻生恵、東アジア地域の山岳国立公園における登山利用行動の管理手法の比較 ～富士山（日本）・玉山（台湾）・キナバル山（マレーシア）を対象として～、レジャー・レクリエーション研究 53 : 112-115、2004
- 95) 廣田治久・栗原邦秋、知的障害者の余暇活動についての事例報告 ～A地区の知的障害者学級を事例として～、レジャー・レクリエーション研究 55 : 30-31、2005
- 96) 油井正昭、世界各国における野外レクリエーションに関わる保護地域の発展とその特徴、レジャー・レクリエーション研究 55 : 44-47、2005
- 97) 迫俊道、伝統芸能継承団体の再生過程に関する実践報告 ～伊勢神楽十二神祇の場合～、レジャー・レクリエーション研究 55 : 48-49、2005
- 98) 山崎律子・上野幸・高橋和敏、特別擁護老人ホームにおけるレクリエーション・プログラムの課題 ～その支援方法の確立に向けて～、レジャー・レクリエーション研究 55 : 50-53、2005
- 99) 吉原さちえ・西野仁、総合型地域スポーツクラブの設立に向けた2年間の取り組み ～神奈川県育成指定クラブを事例として～、レジャー・レクリエーション研究 55 : 60-63、2005
- 100) 山下雅彦、中山間地域における体験型観光推進協議会の設立について ～広島県北部の取り組みに着目して～、レジャー・レクリエーション研究 55 : 64-67、2005
- 101) 山崎律子・上野幸・高橋和敏、デンマークにおける公営高齢者（含認知症者）介護型住居・デイサービスセンター併設についての報告 ～IFA会議における訪問見学プログラムから～、レジャー・レクリエーション研究 57 : 28-29、2006
- 102) 高橋伸・廣田治久、レジャー教育としてのキャンプ・プログラム ～Camp O-AT-KAにおける実修活動～、レジャー・レクリエーション研究 57 : 34-35、2006
- 103) 吉原さちえ・西野仁、総合型地域スポーツクラブの運営の実態 ～神奈川県内18クラブを事例として～、レジャー・レクリエーション研究 57 : 44-47、2006
- 104) 小池和幸・高崎義輝、介護予防教室における目的別レクリエーションプログラムの開発と効果に関する研究（1）、レジャー・レクリエーション研究 57 : 52-55、2006
- 105) 草壁孝治・左近慎平、老人病院における余暇支援 ～余暇自立支援の試み～、レジャー・レクリエーション研究 57 : 60-63、2006
- 106) 吉岡尚美・植木順子・佐藤宏子、高齢者施設における楽しいレクリエーションプログラムの楽しさについての研究、レジャー・レクリエーション研究 57 : 64-67、2006
- 107) 竹田隆行、レクリエーション組織とプロスポーツクラブとのパートナーシップ事業に関する報告、レジャー・レクリエーション研究 57 : 88-89、2006
- 108) 鈴木英悟、救急救護法実践指導にみるガイドライン2005変更の視点 ～ガイドライン2000から2005への変更領域を中心として～、レジャー・レクリエーション研究 59 : 16-19、2007
- 109) 高橋伸、アメリカ組織キャンプにおける儀式プログラム ～Camp O-AT-KAにおけるギャラハッド（騎士）プログラム～、レジャー・レクリエーション研究 59 : 24-25、2007

〔Ⅲ〕 特別企画「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」

- 110) 矢野加奈子・麻生恵、農山村における空間計画ワークショップに期待される効果とその構造化に関する研究 ～長野県千曲市埴捨地区を対象として～、レジャー・レクリエーション研究 59 : 40-43、2007
- 111) 吉原さちえ・西野仁、求められる総合型地域スポーツクラブ ～神奈川県内総合型地域スポーツクラブのクラブ理念やその目的を参考にして～、レジャー・レクリエーション研究 59 : 48-51、2007
- 112) 吉原さちえ、地域スポーツクラブに所属する父親の「仕事の日」と「休みの日」の1日24時間の使い方、レジャー・レクリエーション研究 61 : 48-51、2008
- 113) 添田直人、ボート競技による水辺環境の復権 ～親水メディアとしてのボートの中心価値～、レジャー・レクリエーション研究 61 : 56-59、2008
- 114) 土屋薫・茅野宏明・マーレー寛子・佐橋由美・佐藤馨、レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究、レジャー・レクリエーション研究 61 : 90-93、2008
- 115) 見田賢一、エンパワーメントによるツーリズム協働事業定着に向けてのグループワークに関する研究、レジャー・レクリエーション研究 61 : 94-95、2008
- 116) 馬場美智子、公園整備の観点から見た余暇活動のためのまちづくりに関する考察、レジャー・レクリエーション研究 63 : 18-21、2009
- 117) 脇谷翔太郎・麻生恵、まちづくりや環境整備における多様な主体と地域の連携構造に関する研究、レジャー・レクリエーション研究 63 : 22-23、2009
- 118) 山下雅彦、バリ島におけるラフティング参加者のリスク認知に関する研究 ～日本人参加者に着目して～、レジャー・レクリエーション研究 63 : 24-27、2009
- 119) 添田直人、水元公園（東京都・葛飾区）でボートが漕げるまで ～水辺空間の再構築に関する考察～、レジャー・レクリエーション研究 63 : 28-31、2009
- 120) 関口英里、現代日本のレジャー空間におけるイベント戦略の展開と可能性 ～テーマパークを中心とした外来祝祭の“Japanization”～、レジャー・レクリエーション研究 63 : 32-35、2009
- 121) 松尾瑞穂・前橋明、石川県における幼児の健康福祉に関する研究 ～保育園における親子のふれあいレクリエーション企画と実践～、レジャー・レクリエーション研究 63 : 40-43、2009
- 122) 若野貴司・末吉勝則・大城宜哲・寺本洋一・高谷富江・石川治・今脇節朗、回復期リハビリテーション病院におけるセラピューティックレクリエーションの取り組みについて ～個別介入プログラムでの症例を通して～、レジャー・レクリエーション研究 63 : 50-53、2009
- 123) 草壁孝治・今井悦子・田邊真規・野村滋美・恩田淳江・小池良江・橋本千里、病棟スタッフによる余暇支援の取り組み、レジャー・レクリエーション研究 63 : 54-57、2009
- 124) 土屋薫・佐橋由美・佐藤馨、レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究（2）～流山市民調査によるレジャー志向とその実態の検討～、レジャー・レクリエーション研究 63 : 62-65、2009
- 125) 佐藤馨・佐橋由美・土屋薫、レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究（3）～熊本市民調査によるレジャー志向とその実態の検討～、レジャー・レクリエーション研究 63 : 66-69、2009
- 126) 前橋明・松尾瑞穂、幼児・児童の健康づくりシステムの構築 ～親子で楽しく！！いのっ子スポーツフェスタの企画～、レジャー・レクリエーション研究 63 : 80-83、2009